

2020年10月25日 礼拝メッセージ

聖書: マルコの福音書10章13~16節

説教: 子どもたちを来させなさい

はじめに

週報の表紙にマルコの福音書10章14節のみことばが掲げられています。今年度はこのみことばを掲げながら、子どもたちと大人の一緒の礼拝を始めたいと願い、子ども礼拝準備委員会の皆さんとともに準備してきました。当初、いろいろな心配がありました。祈りのうちにこの8月からスタートすることができ、まだまだ不十分なところはあるかもしれませんが、少しずつよりよいものにしていければと願っております。

本来であれば、今日の話は年次総会が予定されていた5月24日にお話しすべき事でしたが、コロナのことがあって一緒に集まることが難しい状況でしたので、今日になってしまいました。改めてみことばから、なぜ私たちは子どもと一緒に礼拝をめざそうとするのかを確認したいと思います。

1 高慢になる弟子たち

1) 背景 (9章31節以降)

今日の箇所は、9章からの流れと大きくかわりがあるので、そこから始める必要があります。それでまず9章31節までさかのぼると、そこには、イエスがまもなく人々の手に渡され、殺され、三日目によみがえるという大切なことを伝える場面があって、弟子たちはそれを聞いてもまったく理解できないばかりか、「だれが一番偉いのか」、すなわちお前よりも自分が偉いと言い争いをしていた。高慢の極みということです。

そんな様子をご覧になっていたイエスは、9章35節でこのように言われます。「だれでも先頭に立ちたいと思う者は、皆の後になり、皆に仕える者になりなさい。」そうして、子どもを真ん中に立たせ、腕に抱きながらこう言われました。「だれでも、このような子どもたちの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、だれでもわたしを受け入れる人は、わたしではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」

これがどんな意味なのか、詳しい説明が一切ありません。すぐに別の話題に移ってしまいます。ところが、10章13節になってまた子どもの話に戻る。そのような展開になっております。これは別々ではなくて、続いているものとして読むべきでしょう。そのことをおさえてから今日の箇所に入ります。

2) わたしのところへ来させなさい

10章13節。「さて、イエスに触れていただこうと、人々が子どもたちを連れて来た。ところが弟子たちは彼らを叱った。」

どうして親たちが子どものたちを連れてくるのかは、ここだけ見ても分かりません。さきほど9章のところで、イエスが子どもを引き寄せて腕に抱きながら「このような子どもたちの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、(神を受け入れたのです)」と語ったことを思いだしてください。この噂があつという間に伝わったようなのです。日本でも、有名なお相撲さんに赤ちゃんを抱いてもらおうと元気に育つという言い伝えがあるそうです。もしかしてそれに似ているかもしれない。すっかり有名人になったイエスにうちの子も抱いてもらおう。それが無理ならせめて触れていただこう。そんな思いで親たちが子どもを連れて来て大騒ぎになった。それで弟子たちが動くわけです。

テレビなどで、アメリカ大統領の周りにサングラスをかけた強面の警護官が立っているのを見ることがあります。弟子たちはあれと同じです。イエス先生に言われる前に、先生の心を忖度して先回りして働く。それが一番偉い弟子だと思っている。それで集まって来た子どもたちに、「あっちに行け。邪魔だ」と叱りつけます。これをご覧になったイエスは憤って、「こどもたちを、わたしのところへ来させなさい」と言われます。この「憤る」というのは、ちょっと気分を害してというレベルではなく、「非常に腹を立てて」、少し誇張して言えば「顔を真っ赤にして」というほどの意味です。

3) 神の国を受け継ぐのだから

よかれと思ってやったことが、逆に叱られたのですから、弟子たちはとまどったでしょう。なぜイエスは叱りつけたのか。理由はこうです。「神の国はこのような者たちのものなのです。まことに、あなたがたに言います。子供のように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」

イエスがことさらに子どものことを大切に思っているのよいは、ここでも強い言い方をせずにもっと穏やかな話し方でもよいのではないか。そんなふうにも思いたいところですが、イエ

スにしてみれば、子どもたちがイエスの所へ来られないということは、絶対にあってはならないことと感じているようなのです。

ここでいくつか疑問が湧いてきます。二つ挙げます。一つ目の疑問。子どもとはいったいどれのことか。二つ目。これは、皆さんが思っていることかと思いますが、子どものように神の国を受け入れる者とは、いったいどのようなことなのか。具体的には、どうすることなのか。

2 子どもとは誰のことか

1) 小さな子ども

まず一つ目の疑問から。子どもとはいったいどれのことか。いや、そんなことは決まっている。年のいっていない小さな子どものこと。そのとおりです。イエスは子どもたちの上に手を置いて祝福していますし、子どもたちこそイエスの前に来るべきである。そう言われました。今礼拝の中で、子どもたちが前に出て来てお話を聞く時間を持っているのはこのためです。

2) 皆の後になり、仕える者がどうして？

では子どもとは、小さな子どものことだけなのか。というのは、弟子たちが「だれが一番偉いのか」と争ったことから9章35節で、「だれでも先頭に立ちたいと思う者は、皆の後になり、皆に仕える者になりなさい」と言われて、そこから子どもの話になった。これらは全部つながっているはずですから、実際の子どものことだけを言っているのではなさそうです。話しは単純ではない。

単純ではない理由がもう一つあって、イエスは矛盾したことを言っているように聞こえるのです。皆の後ろになった時点で、絶対に先頭に立つことはできないではないか。他人のために仕えてばかりいたら、絶対に先頭に立てない。どう考えても理解できない。とは言いながらも、完全に否定できない部分もあります。

昔、会社員として働いていたとき、鬱っぽくなり食欲もない、体調が悪いので病院に行ったら胃カメラを飲まされ、「出血しています」と言われたことがありました。仕事のストレスが原因でした。上司から「もっと頑張れ、成果を出せ」と言われても人間には限界というものがある。限界を超えてしまうと、糸が切れるようにして心が折れてしまいます。私はなんとか持ち直しましたが、からだをこわして仕事を辞めなければならない人もおります。皆に負けないように頑張っていたのに、ある日、坂道を転がり落ちるようにして「皆の後

ろ」になってしまう。この世の価値観から言えば敗北で、希望など全くない。ところがイエスは皆の後ろになる者が先頭に立つことなのだと言う。もし本当ならば、これは希望になる。でもどうやってなのか禅問答のようでわかりません。

3) イエスの模範

いつもそうですが、イエスのご自分のことをわきに置いて何かを語る方ではありません。今日の箇所でも、こう語るからにはご自分が率先して模範を示す覚悟をしながら語っているのではないか。イエスが、「子どものよう神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできない」と言われたからには、イエスご自身も子どものようになられると考えたらどうでしょう。十字架において子どものようになられたと考えるのです。「子ども」とは誰のことか。実は、イエスご自身を指している。意外に思われたでしょうか。

弟子たちにとって子どもは邪魔者にしか見えません。それで追い払おうとした。それと同じように、イエスはこの世から邪魔者だと言われ、十字架に追いやられて殺されたのではないですか。子どもは大人に抵抗できません。イエスがおかかりになった十字架も同じです。抵抗できないように手と足を釘で打ち付けられ、人々からののしられ、叱られ、邪魔だ、おまえなどいなくなれと言われて、殺されていく。このようにして、子どものようになるとはどのようなことかをご自分の体で示してくださいました。

4 子どものように神の国を受け入れる

1) この方の名のゆえ

では二つ目の疑問。「子どものように神の国を受け入れる」とはどういうことか。イエスが模範を示してくださったように、あなたがたも十字架にかからないと神の国には入れないということか。もちろんそうではない。十字架におかかりになるのはイエスお一人だけです。よく読んでください。9章37節真ん中。「このような子どもたちの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。」

「わたしの名のゆえに」とあります。こういうことではないか。イエス・キリストは、役に立たない子どものように扱われてこの世から追い出されて十字架におつきになりました。私たちはいったい誰を十字架につけたのか。神のひとり子を十字架に追いやって殺したのは、私たちではないですか。私たちはこの方より偉かったのか。とんでもあり

ません。私たちこそ、お前など邪魔だからあっちに行けと追い返される子どものような者だった。ところがイエスはなんと言ったか。絶対に邪魔をしてはいけない。わたしのところに来させなさい。

そんなふうに言うてくださる方をあなたの救い主であると認めるならば、あなたはりっぱな子どもである。神の国はあなたのものだから。あなたも神の国に招かれている。

2) 私たちのうちにある「子ども」

この箇所を「子どものように素直になって受け入れる」と解釈することがあります。もちろんそれもある。でもイエスはもう一つ深いことも語っているのではないか。みなさんは大人で、自分は子どもではないと思っていらっしゃるはずですが、でもどうでしょう。私はいま腰が痛くて前にかがむことができません。今朝顔を洗うとき困った。洗面台の前で膝をついてやっと顔を洗った。子ども時代、背のびしながら顔を洗ったことを思い出しました。私たちは年齢を重ねると、だんだん子どもに戻らざるを得ない。最後は人の手を借りなければ生活できなくなる。だれもが最後は子どもになっていく。そんな自分を受け入れる事は大変難しい。でも自分は弱い子どものような者なのだと思うなら、だれもが神の国に招かれる資格がある。大きな救いのみことばであったことに気がつきます。